

丹青

吉田 宏子

明の万暦年間(日本の安土、桃山時代にあたる) 蘇州は、織物工業、商工業が目覚しい発展をとげていた。水利の便も良く、絹の都として国外にも販路をもっていた蘇州の運河港は、大勢の人が働き活気に溢れていた。商店が建ち並び、大きな船が停泊する場所は、木徳鎮(ほくとくちん)と呼ばれ、運河のほとりの酒楼はいつも賑わいを見せていた。

船が出航した後で静けさが戻っていた。官舎の入り口でなにやら声高な話し声がする。

「本当に、丹翰の石頭には困ったものだ」

「丹翰は役人だ。ほっとけばよい。要らないって言うのだからかまうな」

「それでは、私達ばかりが阿漕なことをしているように思われる」

「そんなことはない」すぐさま一番の年長者が切り返した。

「相手は、絹を、一日早く出航させてくれっていつている」

「今日の品物は一週間前から決まっているものばかりだ。荷物は一杯で、反物は積めない」
っていうのを、陶器を次の船にまわして、反物を積みこんだっていうわけだ。

なまに、天候がくずれたら、今日出ようが、三日後に出ようが変わりはないさ。悪いようにはしないって言うってりゃ良い。懐が潤う。お金を貰っておいて、便宜をはからないのではない。貰った分だけのことはしている」

「もっともだ」口元に笑いを浮かべてひとりが頷いた。

彼ら胥吏(しより)。科挙によらず、民間から選ばれた、仕事を手伝つ事務屋(には俸禄がない。事務用品代、お茶代が出るだけである。そこは地元根付いた者の逞しさ、至る所で賄賂を要求し、任期で去って行く役人達より力を持っている。

明の時代は俸禄がどの時代より低かった。少ない俸禄を賄賂で補つ。そのどこが悪い。賄賂を取らない丹翰は変わり者でしかなかった。胥吏(しより)達は、頑強でしたたか者の勢ぞろいだ。

「噂をすれば、丹翰だ……」仲間がさっと目配せた。丹翰が向こうからやってくる。顔が小さく手足が長い。背は人より幾分高めだが、顔が小さい分ひよろひよろに見えた。ひよろひよろの背をかがめて歩いてくる。

「お大層様は、お金がいらなくなっていうんだから、たいしたものだ」

聞こえよがしの一言が押しつぶした笑いとともに聞こえたが、丹翰はとりあわず、足早に中に入って行った。同僚のとやかく言つものにももう慣れた。何をどう言われようと苦にならない。自分は間違っていないと言つ自信があった。男の子が授かってからというもの、丹翰の世界が変わった。

明の時代、科挙の権威は最高潮に達していた。難関の科挙の試験さえ合格すれば、農民の子であっても、官界の地位は思いのままである。知識人たちは熱く燃えた。

丹翰は父親を早く亡くし、進士の夢を半ばで断念している。嫁は、父親が健在の内決めた人で、素養があつた。丹翰は幼子を膝に乗せ、果たせなかつた夢の続きを思い描いた。早くから千字文を聞かせ、時間の許すかぎり、遊びの中から学ぶ習慣を身につけさせた。子は見込みがあつた。丹翰の野望を知る者はいなかつた。

七歳になるのを待って寺子屋に通わせた。不意を付かれた周りの人々、とりわけ丹翰の同僚の驚きようはなかつた。

「丹翰は、息子を拳人にでもするつもりかい」

「倅がそんなに優秀だとは知らなかつた。これは驚きだ」

「丹翰に何ができる。大きな勘違いをしているのだ」

仲間内で、何かにつけ自分が一番と思っていた者は悔しさも大きい。

「丹翰、私の知り合いに、何度も科挙の試験を受けている者がいるが、未だに合格しない。家は落ちぶれていく一方だ。周りの者には、悪い夢を見ているようにしか思えん。悪い事は言わない」

「それにしても、何拳人とはえらい違いだ」

何を言っても動じない丹翰に郷を煮やした同僚は、この地区の名士「何拳人」の名を持ち出した。

郷試「きょうし。科挙の第一次の地方試験」を受ける資格を持った人を生員(生員になるにも試験がある)郷試に合格した人を拳人という。

何拳人の家は元より裕福な家で、丹翰と比べるもなかつたが、人は原「もと」を納得しなかつた。そして、日頃の丹翰のつましい暮らしぶりの、どこに科挙に挑戦する余裕があ

るのかを知りたがった。

「親の遺産がありましてねえ。とでも言いたいのですが。お粥をすすっていたのですよ」
丹翰の妻は、世間の興味を笑ってかわした。同僚達は、丹青に一步抜き出られたことが悔しかった。世相に疎い、昼行灯のような丹翰にやられたのだから、やっかみが口を突いて出た。

丹翰の子は名を丹青と言った。父親似で手足が細く、生え際の巻き毛が、眼に陰影をつけ、見るからに賢そうな顔立ちをしていた。教師や丹翰の蒔いた興味の種を面白いように吸収していった。父親は、この長い戦いの最後の決め手は、体力であり、精神力であると考え、普段から鍛えることを忘れなかった。

寺子屋で、一緒に学ぶ中に南田という子がいる。父親南岳は指揮使で、大勢の下男、下女が働いていた。南田は、南岳が歳を取ってから外に出来た子で孫のような子を溺愛した。「後々面倒なことはないません。赤子は私と一緒に住まわせてください」
涙を浮かべて頼む母の言葉は受け入れられず、南岳夫人は、ふたりを屋敷に住まわすこともなく、赤子を母親から強引に引き離した。南岳指揮使の思い入れの強いのに、嫉妬したと言われている。

南田は、生来天衣無縫な子だった。南田には寺子屋について来る勉強相手がいる。一緒に学んで一緒に帰っていく。小者は影のように従った。

子どもも十一、二歳ともなると、社会の身分の上下も分かって、父親の権力をかさねることを覚える。南田の小者は世相を見るのに長けていて、仲間を作って群れたがる。何かにつけ南田に寄って行って耳打ちをする。その小狡さが、外の子たちには我慢ならない。最後は、片や南田の大将に、純朴なその他の味方をえた丹青。どちらも負けず嫌いで、後には引かない性格で、取っ組み合いとなった。

「丹青、脚を払え」「もっと頭をつける」
困んだ子どもたちの声援が飛ぶ。
南田のきりりとした眉がつりあがり、口元が歪んだ所までは見えた。あと一息、頭をぐつと下げ力まかせに体をひねった。次の瞬間、南田が宙を飛んだ。わつと言つ声に振りかえると、額に血を滲ませて南田が転がっている。「教官を呼んで来る」「一人が駆け出した。」

「これから国の役人にもなるつと言つ者が、人を投げ飛ばすとはなに」とだ
丹青はひどく叱られた。これまでも喧嘩はあったが、少々のは大目に見られてきた。教官が、南田の父親を意識してのことが子供心にも分かって、無性に悔しかった。

争いの原因は、この界限に坤維（こんい）という科挙の試験を何度受けても、落第し続

けた人がいる。もつ今では落ちぶれ、街はずれの酒店で労働者に混じって、立飲みし、人々の嘲笑の中を帰っていく。よれよれの身なりで、ある時は暮らしが立たず盗みまでもやっただ。科挙の試験を受けたほこりは微塵もなく、子供たちに「やーい、こんこんい」とからかわれ、坤維の困惑の表情の弱い光がしばたたく。それでも子どもたちは容赦しない。

ある日の寺子屋の帰りに、丹青は雨上がりの道端の堀に落ちてしまった。泥の中でふんばるが足が抜けない。もがいていると、その時坤維が通りかかった。坤維が泥の中から靴を抜いてくれた。泥だらけの靴をぶらさげて帰る途中、坤維は丹青に勉強をしているのかと聞いてきた。丹青は小脇に本を抱えていた。

坤維の力を借りてしまったという屈辱で、消え入りそうな声で「はい」と答えると、坤維は嬉しそうに

「それはよい。それでは千字文は全部書けるか」

と聞いてきた。丹青が黙っていると、坤維は棒切れをつかんで、地面に「天地玄黄(てんち はげんこう)」と書き、直ぐその横に「宇宙洪荒(うちゅうはこうこう)」と書き足した。坤維の知性が覗いた瞬間だった。このままではまずいような気がして、丹青は途中で駆け出していた。坤維に教わる自分が恥ずかしかった。運河沿いの通りで、坤維の弱い視線に会う度に、丹青はなんとも言いようのない悲しい気持ちにおそわれた。

その坤維が、どうしてあんなふうになったかという話である。

「始めから経済的に無理があった。無理してまでも科挙に挑戦しなくても良かった」南田の楯田の無邪気な眼は、おまえも坤維のように、裕福でもないのに科挙に挑戦するのかと言っているようで、丹青の若い自尊心はひどく傷ついた。

「坤維は、合格したいと言いつつ気持ちちが希薄だった」

泡を飛ばす勢いで反論する丹青。裕福でないことと坤維の挫折とは無関係と思いたい。

最後は、折れない丹青に卑怯にも父親の威厳を着て、南田のとりまき連中は側からとやかく言う。「変わり者の丹翰の子」子供は残酷だ。争いの的は外れ、最後は南指揮使のお屋敷の大きさと、使用人の数をちらつかせ、「丹翰の子が南指揮使の子息にかみついた」と攻め立てる。勝負はあくまで一対一であるべきと、丹青は唇を噛んだ。

丹青は考えた。今までは成績が良く、教官、父親に誉められ誇りにも思い、自然勉強にも力が入ったが、簡単に喜べない何かを知った。父親を見くびられ、教官に叱られ、学ぶことに疑問を抱き、悔しい思いを引きずって運河港でぼんやり船を見ていると、賢範じいさんが丹青に気づいて声をかけてくれた。丹青は悔しい気持ちの限りを並べた。黙って聞いて

ていた賢範が言った。

「なあ、丹青。どうでも良いようなことばかりりするな。大きな目標持ったら、もっと懐を大きくしろ。世の中、声の大きな者が勝ったように思うだろうが、天と地は何もかもお見通しさ。それにな、丹青、人生には無駄っていうことはない。悔しい思いをした分だけ、人は強くなれる。丹青、強くなれ」

賢範は、最後は遠く運河を見ていた。

「賢範じいさんはいつも大人「たいじん」だけど、子供が悔しい思いを我慢するのは大変だ。

金持ちも貧乏人も、皆が科挙に挑戦できて、その中で合格が決まるんだったら良いな」

「丹青はつまいことを言っ。本当にその通りだ。でも丹青、世の中、金持ちばかりが合格しているわけでもないだろう。太常少卿「たいじょうしょうけい」までなった楊深盛「ようけいせい」、礼部尚書「れいぶしょうしょ」になった徐階、ともに農家の子だった。どうだ。これだから世の中おもしろい」

「ここまで言っつと、賢範は顎ひげをひと撫でした。

「おまえのお父さんはよく考えた。これからの世の中、何が大事かってな。裕福ではないけど、丹青を勉強させるのがまったく不可能っていつわけではない。お父さんががそう決めたのだ。悩むな。その意に答える。それが一番だ」

丹青は父親に言えない思いを、賢範に話した事で気持ちが軽くなった。

役人の転属の官船が二艘、賑やかに上って行く。港には見送りの人々がまだ残っている。雲がゆったり流れ、縦横に走る運河が日に煌く。見渡す限り水と緑と光の世界。この風景には貧富や優劣はどこにもない。丹青は束の間、風景の中の点となっていた。

丹青は父親から、賢範も昔は科挙の試験の勉強をしていたが、家が傾き自分の志を諦めたと聞いた。以来、寺子屋で小さい子相手に論語を教える傍ら、街の情報だより、名所旧跡の発行などを手がけ、ちょっとした名士となっている。

賢範は、丹青に幼い頃の自分をだぶらせ、つい応援の声をかけてしまつたのだ。

丹青はあれ以来、父親を侮辱した南田とはすっかりライバルになった。丹青にとって、この取っ組み合いのけんかは、後々の良い戒めとなった。

是非とも科挙に合格して、坤維の不合格は努力がたりなかったことを示す必要があった。合格することは南田に勝つことだ。勿論自分のためでもある。世間の誹謗をもともせず勉強に励む。負けはしない。丹青の心に強い味方の賢範がいた。

通過儀礼をつけた少年は、口元きりりと意志を表示し、瞳は厳しく疑問を問い、時に不安気になんかを訴え、思春期の顔へと変わっていった。ある日、丹青は気晴らしにと湖に誘われた。

「丹青、毎日勉強ばかりでは毒ですよ。時には息抜きも必要でしょう、わあ」
急ぎ立てられるようにして知り合いの誘いをつけた。

湖は睡蓮が咲いていた。薄紅や白い花が俗世間とはまったく無縁に咲いている。凌ぎを削る現実とはかけ離れ、天上の花のように清廉である。誘われるまま湖上に出た。今を盛りに咲いているもの、蕾みのもの。間を縫って舟は進む。手元に白い花があり、その先に白、むこうにはまた白。あたり一面白の中で、丹青の神経は清浄、清廉、潔癖、の世界に圧倒された。無数の白い花々があなたは清いかと問い掛けてくる。私はこんなに清くはない。白だけの世界が息苦しく、舟が薄紅の睡蓮のところに来た時は、ほっと一息ついた。清浄も過ぎると、凄惨に近づく。紙一重のような気がした。

その時、一艘の舟とすれ違った。舟には年若い女性が乗っていた。女の紅の薄絹を透かした光が、丹青の心にすべりこんだ。ふつくらした頬は、ほのかに紅く綻びかけた花。黒目がちの瞳がもの言いたげに過ぎて行く。丹青は自分の体がふわと浮いた気がした。総てが錯覚だった。

それからというもの、浪々と巡る運河の流れに、出会いの時の射られるようなときめきを思い、月灯りに恋心を募らせ、木々のそよぎに心乱す。黄昏時は、無性に人恋しく、自然と女の屋敷に足が向いた。

このことは秘めた思いのはずだった。が、賢範が容赦ない言葉をあびせかけてきた。

「丹青、女は試験に受かってからで良い。今が一番大事な時ぞ。何を勘違いしてある。」

さしさわりのないことがあるか。私は女に夢中ですって顔に書いてある。向こうはお前のことなど歯牙にもかけてないぞ」

返す言葉がなかった。気がつけば、確かに夢心地の中にいた。女はまもなく輿入れした。睡蓮の、花の精の戯れか、丹青の初恋は跡形もなく消えて行った。

丹青は南田とのけんか以来、父親を敬遠している。父と自分とでは求める物が違っているような気がした。丹翰は白い花を追い、丹青は薄紅を追った。賢範は、真紅を追っかけている。白と薄紅の差は縮まりそうもない。

南指揮使は偉丈夫である。南田は母親似で、背が高く、肩がきりりとした二枚目で、父親、兄の華やかな影響を受けて、早くから妓楼の出入りも覚え、蘇州の街のプレイボーイ

と騒がれている。世襲で武官を継いだ兄達、張り合つるように、南田は栄達を求めて文科筆を選んだ。南田は、自分の居場所を外に求めるようになった。

その日、庭には紅い牡丹が咲き乱れていた。

酒席は気心の知れたもの同志、和やかに始まった。飲み、話に興じ、浮かれ、匂つくりが始まった。三人の妓女が、華やかに座を盛り立てている。中で一際目立つ妓女がいた。小刀で彫つたようなくつきりした目鼻立ち、眼は澄み、若さの持つ透明感があった。名を溪糸と言った。客は一献傾けながら、それぞれ好きな詩を朗詠する。一回りしたところで今日の席の主、大棟「おおばい」が尋ねた。

「溪糸は誰の詩が好きかね」

「頭を挙げて空しく羨む榜中「ぼうちゅう」の名ですわ」

「ほう、魚玄機「ぎよげんき」だね」大棟が意外だと言つ顔をした。

「魚玄機は賢すぎて、ちょっと恐いのですが・・・かと言って薛涛「せつとう」はやさしすぎて物足りません。李清照「りせいしょう」、烏孫公主「うそんこうしゅ」は、自分の気持ちを素直に出して好きです」

「ほおう、溪糸は強い女性「によしゅう」だ。これは見そこなっていたようだ」

魚玄機も李清照も男性に負けていない女たちである。大棟が以外だったと言うように頷いて、溪糸に一杯進めた

詩の内容までは詳しくは知らなかったが、溪糸が只美しいだけの女でないことは南田にも分かった。自分が苦手としている詩をいともたやすく謡う。好奇心がわいた。その後も即興の詩作は笑いの中遅くまで続いた。

その内一人、二人と迎えの者が来て帰っていった。「先に帰るぞ」一緒に来た兄が、南田に目配せをして帰って行った。

溪糸は酔うほどに目元は紅をはいたように染まり、投げかける視線は情熱的に、時に冷淡に、南田の心を揺さぶる。うつむくたびに見える項の白さ、胸元で動く細い指、自信を秘めた沈とした佇まい。惹かれるものがあった。南田は、酔いの中で少しづつ現(うつつ)を忘れていった。

「さあおひとつ。南指揮使の若様」

南田の出した手が女の弾力のある胸に触れた。南田は媚薬をかがされたように五感が麻痺していった。夜の街で浮名を流してきた、南田の自尊心が萎んでいった。

「官吏登用には、女の色香に迷わない。どんなに酔わされても醜態を演じないという大き

な関門がある。おまえにとって官吏登用は科擧の試験のことだ。簡単に女の色香に迷うな分かるな」

出掛けに釘をさされてきた。しかし、若い情熱の前で理性は何の役にも立たない。庭の牡丹は密やかに花弁を閉じ、夜は更けて行つた。

時折見せる眼光の強さ。どこか弟を思わせるこの進士を目指す若者、どうやら悪い人ではなさそうだ。私を好いてくれそう。私はこの人に賭けてみようか。元はと言えば、藻屑と消えかけた身。

溪系の父親が家族ともども船で任地へ赴く途中、夜、宿泊のため停泊するや、後をつけてきたかのように賊が襲ってきた。賊は情け容赦なかった。振り下ろす一刀の瞬間、「河に飛び込め」父親の絶叫に、溪系と弟は無我夢中で河に飛び込んだ。両親は死亡、弟は行方知れず。溪系は運良く助けられ、この妓楼に身を寄せている。弟もどこかで生きている。生きてさえいればいつかはめぐり合える…。女は若者の腕の中で、密かに夢の続きを描いている。

人を信じられない女の思いと、心底心を許せる人のいない男の孤独が一つになった。若者は女を必要とし、南円は溪系に夢中になっていった。

一方、溪系の楚々とした風情を気に入って、溪系を鼻唄にしてくれる人がいる。蘇州府の表通りで、大きく薬問屋を営む藩門と言つて、年は有に四十歳を過ぎていて。

「分かっていますとも。私も年が年だから難しいことは言いません。子だけ生んでくれれば良いのです」

藩門には子がなかった。何人もの妾をもらつのだが、正妻の嫉妬深さに負けて、相手は病気になったり、逃げ出したりと居続けるものはいない。藩門は切羽つまっていた。子供を育てるのに、親にはそれ相当の年齢がある。年を取り過ぎては行けない。今日も阿漕な話を問屋仲間から聞いたばかりだ。

「自分は今これ以上生きられない。男手ひとつで育ててきた娘の将来を、兄は弟夫婦に頼んだ。もうこれで思い残すことはない。しかし弟は兄が亡くなると、兄の子の面倒を見るところか、屋敷の隅の粗末な小屋に住まわせて、兄が残した財産を一人占めた」

恐ろしい。この世の中、信じることほど重くて価値のあるものはない。私は誰を信じているだろう。おう、恐ろしい、範門はぶるつと身を震わせた。

このようにならないためにも、幼い子が成長して先々の目鼻が着くまで、親は生きてやらなければなるまい。それには今がその最後の年齢。この機を逃したら、築き上げた財産

は誰にやる。妻は甥を考えているが、それは妻の甥だ。我が子以外の者など考えられない。あんな可愛がつてきた梅香との間の女の子は、五歳で亡くなってしまった。今も思い出すと涙が滲んでくる。眼の大きい可愛い子だった。別宅を与えるのだったと悔やんでも後の祭で、やっと喪が明けて、その後の事も考えられるようになった。

男の子が欲しいなどと欲張りなことは言わない、元気な子が欲しい。美人で気持ちのやさしい溪系を逃したら、この年で良い人にはめぐり合うこともないだろう。

藩門は若い競争相手の出現で、一気に気持が固まった。女將に何が何でも溪系を身請けしたい旨を伝えた。

「ようございます。藩門様のご執心ぶりはよく分かっております」

女將は溪系に執心な若者がいることは知っている。しかし、若者がいくら熱心だからといってどつにもならないことがある。思いが強いからで、恋が成就するとは限らない。

若者は南指揮使の子息。まだ科擧の試験に合格していない。合格したら、結婚すると言っているが、南指揮使が妓女を息子の嫁にするとは思えない。若者達の激情に押され、表面上は取り繕っているが、裏では実に繋がる、しっかりした相手は逃がさない。

次の日、女將は溪系を部屋に呼んだ。

「溪系、南田がどんな話をしているか知かりませんよ。でも、総てが及第してからというじゃありませんか。すんなり受かるとは思っけど、失敗したら三年先の話でしょう。女の三年は長いわよ。三年経って、まだ妓楼にいられる子って、どのくらいいるかしら。

第一、南岳の旦那様が承知するものかしら。そりゃ、藩門の奥様だって一筋縄ではいかないでしょうけど、藩門様は、奥様に知られないように、別宅にしてやるって言っている。悪い話ではないと思っけどね」

溪系は自分の気持は決まっている、女將の言葉も耳に入らない。

この世界、口約束など何の証拠にもならないが、南指揮使の意を損なうような強いことも言えず、女將もほとほと困りきっていた。

久しぶりに妓楼に顔を出した藩門の浮かない様子。

「藩門様、いかがなさいました」

「女將さん、どうもこうもありません。溪系は少しもなびいてくれません。

世の中、進士「朝廷で天子が自ら行う試験に合格した人」、進士で、お役人様は飛ぶ鳥落とす勢いですな。私も商人やめて、科擧を目指そうかと思っただこともありました」

「まあまあ、藩門様、「冗談を…」

女将は、話しの意外な展開に、精一杯の笑みでなだめにかかった。

「でもよく考えると、金持ちの商人で気楽に暮らすほうが、ずっと私の性にあっている」
「そうですね、ホホホホ」女将はあわやの胸をなでおろした。

藩門は、進士を目指している若者が恨めしい。私には時間がない…。切羽詰った考えは悪い方へたどり着いた。痛めつけられたら、手を引くのではないか。何と言っても科拳の試験を受ける大事な身だ。藩門はある考えを思いついた。早速、籠や仲間相談した。

「南岳様の若様だつていうじゃないですか。くわばら、くわばら、この身が危ない」
この地で南指揮使を敵に回すなど、土台無理な話しかと思っていると

「良いですとも。ちょっと痛めつけければ良いんですね。旦那さん、この礼は高いですよ」
引きつけてくれたのは、寺守の格治だった。どうやら上手くやる自信があるようだ。

そうとは知らない南田、溪系も分かって待つと約束してくれた。後は科拳に及第するだけだ。自信はある。未来も見えてきた。

ほろ酔い気分の帰り道、堀沿いの人気のない所まで来かけた時、ばらばらと数人の人相の良くない者達に囲まれた。

「誰だ」「何のようだ」「私を南田と知ってのことか…」

問答無用とばかり、相手はじりじり追い込んでくる。屈強な、人相の良くない者ばかりで見構えたのも一瞬。多勢に無勢「早く船の中に入れろ」の声にあつという間に抑えつけられ、引きずられ運搬船の船底に放りこまれた。東林派の争いか、父親の派閥がらみだとすると、手荒なこともするまい、と思っている」

「若旦那さん。悪いことは言わない。溪系から手を引いておくんせえ」

頭らしい者がドスの聞いた声で刃物を頬に押し当ててきた。違つ。これは。溪系がらみだとすると、これはたちが悪い。南田は一気に酔いがさめた。

「どうして溪系から手を引かなきゃならないんだ」

負けん気の強い南田は、この位のことでは動じない。

「何事も溪系のためですよ」

船底に押し付けられた南田を薄暗い灯りの下、五つの顔が見下ろしている。中の一人が口の端に笑いを載せながら言った。

「まだ、試験も及第してないっていうじゃないですか」

「おまえ達には関係ないだろう」

溪系との中を覗かれたように、屈辱に怒りがこみ上げてきた。どの顔も覚えておいて捕ま

えてやる。私を南指揮使の息子と知ってのことだな。渦巻く怒りをどうにか落ち着かせ一呼吸置いて

「もし、私が承知しなかったら……」その時は……」
頬の刀物がすつと喉元に動いた。

とその時「逃がすな」声と同時に、どどどとなだれ込む足音がした。「警官だ」格冶の鋭い声がとぶ。捕まっては一卷の終わりとはばかり、南田を突き倒し必死に戸口に走った。ぶつかりあう音、押し殺した悲鳴。狭い船底は団子状態。悪党はすばしっこく、最後は「逃げられました」と警官の声。「怪我はありませんでしたか」間一髪、助け起こされて外に出た南田が見たものは、月明かりの中、警官の後ろに立っている丹青の姿。そんな、ばかな。間違いではないか。嫌な相手に見られてしまった。総てを察した南田の剛気がへたり込んだ。

気まずい思いの無言で帰る道すがら、南田は丹青に一礼しただけだった。

助けてなどくれなくて良い。迷惑だ。誰がお前などに

悪びれるでもなく、前をぐんぐん行く南田の背がいきり立っている。

私だつて助けたくなどなかった。どうしてひょっこり私の前に現れた

丹青が無言でやり返す。沈黙のまま歩き続ける中、寒山寺の鐘の音が遠く聞こえてきた。

とうとう二人は大通りに戻ってきた。南田は黙ったまま門をくぐって屋敷の中に消えて行った。丹青は憤りで一杯だった。ほっときゃ良かった。後は野となれ山となれだった。

自分のおせっかい、お人よしぶりを自嘲気味に笑った。お前は南田の小者か。とんでもない。丹青は闇の中で頭「かぶり」をふった。

それから何日かが経っていた。

「丹青、お前さん、南指揮使の倅を助けたんだって」

賢範がだしぬけに聞いてきた。南田が話すわけがないし、いったい誰かと訝ると

「警官から聞いたよ。丹青、おまえ株を上げたな」

「株だなんて、とんでもない。あれはまったくの偶然です。」

あの日、堀沿いの道を歩いていると、前に行く南田の姿が跳びこんできました。こんな時刻に何処に行くのだろう。好奇心もあってしばらく眼を離さなかった。南田はいろいろ噂のある人だったから。

しばらく行くと、何処から現れたのか数人が、後ろを気づかれない様について行く。いつのまにかすっかり囲まれ、どんどん暗いほうへ押しやられていく。「これは口撃ではない、

悪党どもが船に連れこむのを見届けて、すぐさま警官を呼びに走ったと言っわけです。

正直言つと、相手が南田と知って、知らない振りをしよう、関わって怪我でもしたらつまらない。競争相手がひとり減る。嫌なやつだったし、いろいろ考えました。思いながら、それでも後ろをついて行った。今でも、只のお人よしだったと思っています」

丹青は賢範には何でも包み隠さず話せた。黙って聞いていた範賢が顔を綻ばせながら言った。

「丹青は間違いなく丹翰の子といつことだ」

すつと眼を窄め、見えないはるか遠くを見るような表情をした。

「丹青、人間、十の努力をしても、表に表われるのは、良くて六、七。どんなに清く生きようとしても三、四はなあなあの世界だ。

それを最初から目標を五に置いたら、達成するのは二、三。いや二、三も無理かもしれん。後の七、八はなあなあの世界っていつことだ。

丹青も科挙を目指している身だ。十を目指す意味、心が分かるだろう。

実はな、お前のおじいさんの丹尚は、その昔、賄賂事件に巻き込まれて失脚した。その時、丹翰は勉強の途中、賄賂は懲り懲りなのさ。そりゃ、家の恥だ、子供には話さないだろう。丹青には、いつ話そうかと思ってきた。

今は賄賂が公然とまかり通る世の中だ。でも、時と場合によっては命取りになる。侮ってはいけない。分かるだろう。今がその時だと思つて話すんだよ」

丹青は頭をガンと殴られた思いだった。変わり者と言われる父親、石頭といわれる父親、賄賂を当然のように要求する役人に憤り、賄賂をもらわれない考えを貫いている父親、丹青は子どもの頃から清廉が重荷だった。世間並に上手くやればよいと思つてきた。

恥ずかしさにみるみる丹青の表情が変わつていった。薄紅は限りなく白に近づきつつあるようだ。

「丹青も成長したもんだなあ」「賢範の口元の皺がしみじみ言った。賢範の暖かい心が丹青の奥深くまで伝わってきて、丹青は満たされていた。

この一件は南指揮使の知るところとなり、南家より丁寧なお礼の品が届けられた。丹翰は特別ありがたがるでもなく、いつもと変わることなく淡々としていた。

この原因が溪系に因ることが分かつて、南指揮使は女将と話をつけ、溪系は南田の所に輿入れした。正妻ではなかった。

その後、藩門は溪系の妹分にあたる若い子を手に入れた。しばらくは溪系より美人じゃ

ない、気持ちが冷たいとか言っていたが、今では子ができ、それは大変な浮かれようだ。お金を惜しまずつき込んで世間を驚かしている。

「あのしまり屋の藩門さんがねえ」

人は、今更ながら血の濃さということを考えさせられた。

「男のこだわったら官吏にする。お抱えの家庭教師はもう決まっている」

と息巻いている。周りの人達は、藩門は店を手放せないだろうと言っている。

女将は八方丸く治まって笑いが止まらない。

「女に磨きをかけりゃ、玉の輿も夢じゃない。」

妓女達にかける言葉も一段と真実味が溢れている。

「女に磨きをかけるって。そりゃ、あなた、器量と音曲の腕と心持です……」

妓楼の格がひとつ上がったそつだ。

事件が広く世間に知れ渡り、南円は男の面子にかけても、この試験を落とすわけにはいかず、追い込みに必死だ。南円の魅力に、含羞がひとつ加わったなどという人もいるが、南円には浮ついたところはない。万感の思いの丹青。若者達。それぞれの懸命の夏は瞬間に過ぎていく。

そして、終に郷試の試験の日がやってきた。丹青は近所、家中の見送りをうけ、父の夢を継いで、沢山の荷物を担いで試験場に向かった。恐ろしいほどの気の入れようで、夢は強く願うほど叶えられるとばかり、一点を見つめて歩いていく。辻で待っていた賢範が、丹青の姿を見るや走りよって声高に伝えている。

「丹青、平常心だ。忘れるな」

暫くして南円が行った。大きな荷物を下男に持たせ、相変わらず試験など何処吹く風といわんばかりである。並々ならぬ自信があるようだ。

夢を託した人々が連なる。眩しい銀白色の太陽が、希望、勇氣、不屈のエネルギーを、溢れるばかりに降り注いでいく。

科挙の試験は貢院で行われる。貢院は狭い房が何千何万、棟割長屋のように連なる。門をくぐると、長い歴史を経てきた異様な雰囲気、圧倒され身がすくむ。

生員(郷試の受験資格を持っている者)は受験を繰り返して、自分の子と一緒に受ける者、神童のような子供、白髪の老人と、受験生は風体も年齢もさまざまである。

丹青はやっと自分の席を探し当てた。幸運にも建物の東端、騒音に煩わされるのも半分ですむ。時は八月(旧曆) 風は心地良い。先ずは幸先良いスタートに気を良くした。

持ってきた品物を並べると、後はする事もなくなりごろりとあお向けになった。想像していた以上に房は狭い。今日から1週間間、缶詰状態の試験の日が続く。試験の合間に煮炊きをし、食べ、寝る。一人で何から何までやらなくてはいけない。

狭く閉ざされた所で何もかもやるとなると、四書、五経「こきょう」をどれだけ学んできたかではなく、どのように生きてきたかを問われるようなもの。

最初良ければ…の言葉のように初日を良い形にもっていききたい。限りを尽くしてきた大勢の競争相手の中で勝ち残るには、実力以上のものを味方につけなければ勝ち目はない。それは運。丹青はじっと眼を閉じ思索を巡らした。

試験は次の日の朝早くから始まった。答案用紙と問題用紙が配られた。翌日の夕刻までに解かなければならない。武者震いがしてきた。緊張の中に墨をする音、紙を伸す音、咳払いがあり、誰もが勝利を信じて一心不乱、院は一匹の巨大な生き物として、一定のリズムで時を刻んでいった。

リズムが崩れたのはその日の夕方。降り出した雨は、闇とともに風も加わり嵐になった。端の房は風あたりも強い。一際強く吹きつけた次の瞬間、ろつそくの灯が消えた。深い闇が院を包んだ。あちこちで悲鳴があがった。悲鳴はどよめきが変わった。灯りがないと字は読めない。丹青は膝が震えた。頭が真っ白になって次の策が思いつかない。両手で膝を押さえ、気を落ち着かす。

「真院には魔物が棲んでいる。丹青、平常心ぞ」

賢範じいさんの言葉が浮かんだ。「平常心」「平常心」呪文のように唱えながら、何度が深く息を吐いた。手探りでろつそくを探す。こんなこともあるだろうと用意してきた。落ち着けば、何も恐れることはない。

荷物を手繰り寄せ、柿渋を塗った雨を防ぐ帳を取り出し、入り口に隙間のないように垂らし、先ず、答案用紙の雨をそっとぬぐった。そこで慌てふためく声がする。稀に見る嵐で、風雨は遅くまで止むことはなかった。この後急に気温が下がって房は寒くなった。丹青は衣を一枚重ねた。

夜も更けるつれ、思うようにはかどらない苛立ちからか、悲鳴に似た叫び声があがった。長い試験は、大荒れの天候も味方につけなければならぬか。丹青は早めに切り上げることにした。まだ灯っている隣の灯りはぐつと我慢して、気分を変え湯を沸かした。熱い茶をすすると少しは緊張もとけ、温まった体でさっとせんべい蒲団にもぐりこんだ。初日はこんな幕開けだった。

試験は最初の出来不出来がその後の明暗を分けた。暴風雨に神経を使い過ぎた者、知力だけを頼りにして来た者、一週間の長丁場は精神力の勝負となった。最後の試験の頃には、極度の緊張の連続で参った者、病気になる者、隣の夜遅くまでついている灯りにすっかり惑わされ、ペースを乱し、眼の下に大きな隈を作って意気消沈している者、それぞれの弱点が諸に出、敗者ははつきり表われた。

そして試験が終わった。誰もが精根尽き果てていた。流れる風の心地よさ。突き上げてくる解放感に、丹青は思わず奇声を発し飛びあがっていた。

「出来はどうだった」「今年が一番難しいー!」「私はもうだめだ」

どっとはき出された受験生たちは、苦しみを労い合い、三々五々街に消えて行った。丹青は隣の房の人を酒房に誘った。初日、田舎から出てきて何も分からないので、宜しくと心細げに挨拶された相手である。いつも遅くまで起きていた。朴訥で、血色の良かった頬から艶が消え、表情が今一つ冴えない。

「八股文(はっこぶん)ができませんでした。私は舅や嫁に反対されながら勉強してきたので、次の試験というものがありません。合わせる顔もなく逃げたい気持ちです」としよげている。

「自信のある者なんてひとりもいません。私も同じです」

丹青はやるだけのことはやった。今は何も考えず、解き放たれた獣のようにただ、ひたすら食い、眠りたいだけだった。相棒も帰る頃には、大分気も落ち着き、出直す気持ちの切り替えもついたようだ。

南円は兄の友人に酒房に誘われた。彼らには再度の挑戦である。

「試験は何度受けても難しい。なまじ次の試験まで三年もあるから余計難しい。一年ぐらいたら、この緊張も持続するだろうが。まあ、よいわ。結果は結果。今日は大いに飲む」「しよぼくれていても仕方がない」「どこまでも剛毅だ。

死力を尽くした受験生は、今日一日を楽しむ術を心得ている。明日の運命は明日にまかせ、今日のこの解放感を味わいたかった。悲喜こもこもの灯りが運河に滲み、街は遅くまで若者で賑わった。

しばらくは心緩やかな日が続いた。九月(旧暦)に入ると、嫌が応でも気が高ぶってくる。全力を尽くしたはずだが、検討違いのことを書きはしなかったか、不安がよぎる。それも総て、押し込めてただその日を待つ。

合格発表の日になった。朝から誰もが落ち着かない。昼近く、表に、一際声高の合格を

知らる官吏の声がして、それと察して集まって来た近所の人々の歓声があがった。

「貴府のご主人、丹青は蘇州郷試に合格した。北京での試験でも続けて合格されるよう」知らせを読む丹翰の声が震えた。声にならないうめきもれた。夢ではない。何度も読みかえすうち「蘇州郷試合格」の文字が幾重にも滲んできた。

父親の生き方に反抗してきた息子。総てを無言の内に受けとめてきた。やはり人生に無駄はなかった。嘲笑も忍耐もこの日のための序章。思い出が次から次に浮かぶ。喜びは静かに突き上げてきた。丹翰は終いには座り込んでいた。

そこに丹青が飛び込んだ。

「お父さん」胸が詰まって咽びになった。

「夢が叶って、人生最良の日だ」丹翰が感極まったように言った。

その一言には、歩んできた人生を慈しむ思いが詰められていて、丹青は胸が熱くなった。感謝、尊敬、信頼、尽きない喜びに満ち溢れていた。

裕福なお屋敷の「何」が拳人になるのは分かる。つつましく暮らす「丹翰の倅」が日々の勉強を積み重ね、最短距離で郷試の合格を勝ち取り、拳人になったのである。誇らしい気持ちだった。

丹青は「魔物を味方につけた」ことを実感した。

あの日が、晴天の素晴らしい日だったら、合格はしていなかっただろう。これが人間の力の及ばない運というものかもしれない。丹青は身が震えた。

次に坤維を思った。坤維の綻びたよれよれの衣服と頼りなげな弱々しい光をたたえた眼が浮かんだ。誰でも坤維になる要素はある。私は坤維にはならなかった。ならなかった。ずしりと重い手応えがあった。坤維を避けていた自分が恥ずかしくなった。

人の心はもつと豊かにならなくてはいけない。

自分の力だけではどうにもならないことがある。丹青は総てに感謝したい気持ちだった。

祝いに駆けつけた人も一人二人と帰っていった。夕暮れのしじまに、寒山寺の鐘の音が遠く聞こえていた。

程なくして、丹青は南円の不合格を知った。